

真砂の者達は、鐘樓を打ち壊し、角材にして鐘の上にうずたかく積み上げた。

道成寺の僧達は、怖れをなしたか……遠くからその作業を、指をくわえて見守っている。

怒った真砂の者たちは、何をするかわからないと、……鐘に閉じ込めてもらおう時、安珍は……僧達に……わざと脅えてみせた……。

それが功を奏している……。

いや……黙々と作業を続けている真砂の者達の表情に……何か手出しを出来ないような雰囲気を感じたからかもしれない。

鐘に積み上げた角材の間に、さらに、隣のネズの樹を切り倒し……葉や枝を折り取って刺して行く……。

真砂の者達が、何をしようとしているのか……道成寺の僧達にもわかり始めた……。

「爾時世尊。従三昧安詳而起。告舍利弗。諸仏智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切声聞。辟支仏。所不能知。所以者何。仏曾親近。百千万億。無数諸仏。尽行諸仏。無量道法。勇猛精進。……」

僧達は、口々にお経を唱え始める……。

「いくぞ！安珍……！」

清次は、鐘の上に積み上げられた角材に火を放つ……。

鐘樓の角材は、乾燥しているとはいえ、簡単には燃えない……しかし、角材の間に刺したネズの葉や枝は、大量の精油成分を含んでいるため、燃えやすい……。

……メラメラメラと音をたてて、炎が鐘の周りを這う……。

同時に真っ黒な煙が、隣の三重の塔よりも、高く、まるで、巨大なへびのように立ち上った……。